

## 巻頭言

# 知の成果に「花の粧」

## 『総合科学研究彙報』発刊に際して

学長 鈴木 昭 憲

岩波茂雄は、岩波文庫発刊の辞において、「真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。……今や知識と美とを特権階級の独占より奪い返すことはつねに進取的なる民衆の切実なる要求である。」と記している。昭和初めの時代的背景を持った言葉ではあるが、その言うところは、現在にも通ずるものであると思う。

真理を求めることが民衆（社会）の要求であるとすれば、学術研究の府である大學に社会が期待することの第一は、真理を追究し、その「知の成果」を世に明らかにする事であろう。その「知の効果」は、何かに役立つという功利的なものだけではない。岩波茂雄がいう、真理をもとめる民衆の要求に応える「知の成果」が求められている。最近では、すこし事情が変わりつつあるとはいえ、大學教員の資格審査が、主としてその発表論文の量や質によってなされてきた理由もそこにあるのであろう。

ところで、かつて学術研究の成果を発表できる機会は限られており、それゆえ、大學人にとって、己の成果を発表する場を得ることは、重大関心事であった。そのような時代にあっては、大學が発行する「紀要」は大學人に自由な発表の場として大きな役割を果たしてきた。ところが、成果の発表の場が学会誌を初めとして充実してきた今日においては、「知の成果」を、社会（民衆）に示すことが「紀要」の役割の第一ではないかと思う。しかしながら、現在における学問の進歩は、学界の外にあるものにとっては容易に近づき得ぬものになりつつある。そこで、「知の成果」に花の粧が必要となる。花は、その美しい色彩と香りによって我々を惹きつけるばかりでなく、蝶や蜂を惹きつけることにより受粉の手助けをさせている。花の色や香りは、子孫を残すという機能の本質ではないかもしれないが、それなくして花は存在しない。「知の成果」を社会に発信する「紀要」においても、色香の豊かな「花の粧」が欲しいと思う。それは、学問の本質ではないかもしれないが、大學における「知の成果」発信において、いまや必須の要素であると思う。

本紀要が、本学の総合科学教育研究センターにおける研究成果発表の場として、その役割を充分果たされることを期待したい。